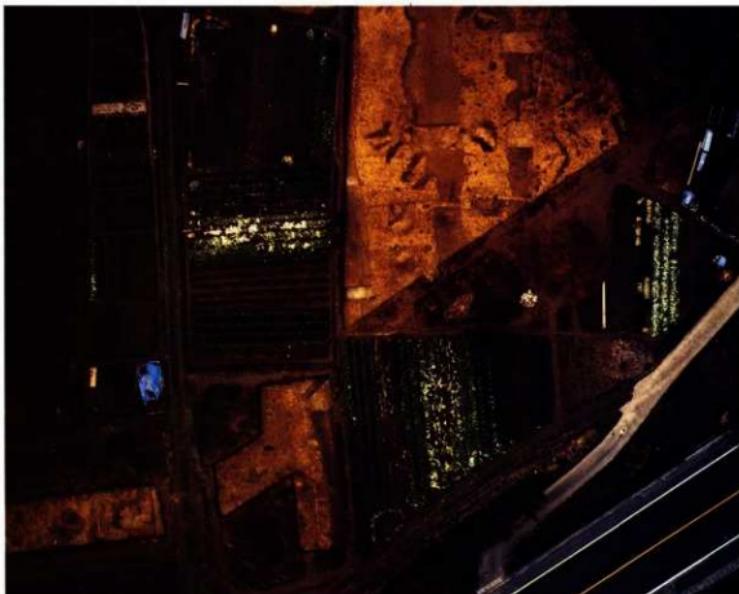


築館町文化財調査報告書第9集

伊治城跡

－平成7年度：第22次発掘調査報告書－



外郭南西地区

平成8年3月

宮城県 築館町教育委員会

伊治城跡

－平成7年度：第22次発掘調査報告書－

平成8年3月

築館町教育委員会



伊治城跡全景

中央の集落のある台地全体が遺跡範囲

【この空中写真(昭和51年撮影)は、建設省国土地理院長
の承認を得て、同院撮影の写真を複数したものである。
(承認番号 平8東復第281号)】

序

築館町がめざしているまちづくりの基本理念は、歴史、伝統、文化、自然を活かしながら、優しいこころにつつまれた歴史と未来がクロスするまちづくりであります。このため、旧石器時代から現代へと続く歴史的遺構・文化財の調査研究と保護・活用に積極的に取り組んでいるところであります。

近年、高森遺跡・上高森遺跡から杉葉師にいたる歴史的遺構の調査・保存を行っているところですが、伊治城跡の調査保存もその一貫として行っているところであります。

伊治城につきましては、史書にその創建が記されておりますが、長年、その所在地は特定できませんでした。そこで、昭和52年度より3年間、宮城県多賀城跡調査研究所が、統いて、昭和62年度より築館町教育委員会が、宮城県教育庁文化財保護課の協力を得て、有力な擬定地であった城生野地区において発掘調査を進めてまいりました。その結果、平成3年度の調査においては、伊治城の中核である政庁を確認するに至りました。その後も伊治城跡の規模・構造を解明する発掘調査を毎年続けております。

本年度の調査は、昨年までの成果をうけて、伊治城の範囲をつかむため、南西部の外郭区画施設の検出を目的に進めました。調査の結果、外郭南西地区では区画施設の一部とみられる大溝跡を検出いたしました。また、内郭北地区では、昨年一部が検出されていた掘立柱建物跡の柱穴を3基検出し、建物跡の規模がほぼ解明されました。

調査を担当した築館町教育委員会の職員をはじめ、調査並びに指導や出土遺物の整理と報告書の作成まで協力をいただきました、宮城県教育庁文化財保護課の皆さん、特に直接担当されました、佐久間光平技術主査、八嶋伸明技師に深く感謝を申し上げるとともに、今後も調査を進めてまいりますので、ご指導をお願い申し上げ挨拶といたします。

平成8年3月

築館町教育委員会

教育長 南 條 正 臣

例　　言

1. 本書は、宮城県栗原郡築館町字城牛野に所在する伊治城跡の平成7年度発掘調査（第22次調査）の成果をまとめたものである。
2. 調査は、国庫補助事業計画にもとづくものであり、築館町教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会が担当した。
3. 調査期間・面積は調査要項に示したとおりである。
4. 調査時における地区割りは、城生野公民館前の伊治城跡「原点1」を基準点(0,0)とし、この点と「原点2」とを結ぶ線を基準として直角座標を組み、割り出している。基準線の南北軸は $2^{\circ} 8'$ 8" 西偏する。基準点の座標値（第X系）は以下のとおりである。

原点1 X = -137,175.996 Y = 18,059.271

原点2 X = -137,172.798 Y = 18,145.712

5. 本遺跡の位置を示した地形図（第2図）は、建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「金成」「築館」を複製して使用した。
6. 調査成果の一部は、現地説明会、第9回宮城県遺跡調査成果発表会、第22回古代城柵官衙遺跡検討会すでに公表しているが、本書の内容はこれらに優先するものである。
7. 発掘調査および報告書作成にあたっては、宮城県多賀城跡調査研究所をはじめ多くの方々のご協力をいただいた。
8. 本書の作成は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、課員の検討を経て、佐久間光平・八嶋伸明が資料整理にあたり、佐久間が編集・執筆した。
9. 発掘調査の記録や整理に関する資料および出土品は、築館町教育委員会が保管している。
10. なお、これまでの本遺跡の発掘調査および調査報告書（11冊）については、本文の後の付表1にまとめて示してある。

凡　　例

1. 図中の方位は、座標北を表している。
2. 図の縮尺率は、各図ごとに示した。
3. 図中の地区割り：W-150、S-400などの表記は、原点1から西に150m、南に400mであることを表す。
4. 遺構略号は以下のとおりである。遺構番号は前年度からの通し番号で、本調査では420～444を用いし、各遺構に付した。

S B : 挖立柱建物跡 S D : 溝跡 S E : 井戸跡 S I : 穴道構造 S K : 土壙
S X : その他（溝状道構など）
5. 土色の記述は「新版標準土色帳」（1973）にもとづいた。

調査要項

1. 遺跡名 伊治城跡（宮城県遺跡登録番号：41007）
2. 所在地 宮城県栗原郡築館町字城生野
3. 調査主体 築館町教育委員会
4. 調査担当 宮城県教育庁文化財保護課・築館町教育委員会
宮城県文化財保護課 佐久間光平 八嶋 伸明
築館町教育委員会 千葉 長彦
5. 調査期間 第22次調査：1995年10月5日～11月14日
6. 調査面積 約1,140m²
①外郭南西地区（A～C, 1区） 936m²
②内郭北地区（D区） 204m²
7. 調査協力 高橋 金作 高橋 一男 高橋 一司 高橋 安麿 小野寺たか子
千葉 朋義 千葉 照治（敬称略）

目 次

- 序
例 言・凡 例
調査要項・目 次

I. 遺跡の概要.....	1
II. 遺跡の位置および周辺の遺跡.....	1
III. 第22次調査.....	3
1. 調査の目的.....	3
2. 調査の方法と経過.....	6
3. 検出遺構と遺物.....	7
①外郭南西地区.....	7
②内郭北地区.....	18
4. 考 察.....	21
引用・参考文献.....	24

付表1. 「伊治城跡」発掘調査および報告書一覧

2. 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

報告書抄録

写真図版

I. 遺跡の概要

伊治城は、律令政府が陸奥国経営の一環として神護景雲元年(767)に現在の宮城県北部の栗原地方に設置した城柵である(第1図)。続日本紀や日本後紀には延暦15年(796)までの約30年間、この城柵に関する記録が登場する(付表2参照)。なかでも、この地域(上治郡)の大領であった伊治公啓麻呂が宝亀11年(780)に按察使紀広純と牡鹿郡大領道嶋大槻を伊治城で殺害し、さらに国府多賀城を攻撃し放火するという「伊治公啓麻呂の乱」は、当時の政府には衝撃的な事件であった。



第1図 東日本の古代城柵（進藤1991より）

この伊治城の所在地については、これまでいくつかの候補地があった。しかし、有力な擬定地であった当地の発掘調査が多賀城跡調査研究所によって昭和52年から3年間、その後昭和62年度からは築館町教育委員会・宮城県教育委員会によって毎年継続的に調査が行われ、本遺跡が伊治城であることは確実になった(付表1参照)。これまでの調査によって、伊治城は東西約700m、南北約900mほどの広がりをもち、台地の南東部に東西約56m、南北61mの築地塀でかこまれた「政庁」、この政庁をさらに取り囲む東西185m、南北240mの範囲に「官衙」域、その外側には堅穴住居群が配置されるという構成であることが次第に明らかになってきた。また、「政庁」域の建物群は大きく3時期の変遷があることや大規模な火災があったことなども確認されている(築館町教育委員会 1993)。

II. 遺跡の位置および周辺の遺跡

本遺跡は、宮城県栗原郡築館町字城生野に所在する。この場所は多賀城の北約52kmの位置にあり、多賀城と胆沢城を結ぶほぼ中間地点にあたっている。

宮城県北部の地形を概観すると、中央部に北上川が流れ、その西側には奥羽山脈が南北に大きく横たわっている。この奥羽山脈は山麓部で多数の河川によって開析され、いくつかの小丘陵に分かれている。本遺跡はその最も北に位置する築館丘陵東端部の標高20~25mほどの平坦な河岸段丘上に立地している(第2図)。この段丘は南西部で背後の丘陵と接続しているが、周囲を一迫川・二迫川などの河川や小さな谷によって画され、北に張り出す独立した地形をなしている。周囲の沖積面との比高差は約5~6mである。遺跡の範囲はこの段丘の全域にわたり、その範囲は東西約700m、南北約900mと推定されている。

遺跡は現状では宅地や畠地・水田として利用されているが、段丘の北端部には東西にのびる長さ150mほどの空堀状の大溝と、その北に接して走る土塁状の高まりが今でも残っている。これらは、昭和52年度の多賀城跡調査研究所の調査によって伊治城跡の北辺の外郭施設であることが確認された（多賀城跡調査研究所 1979）。

本遺跡（第2図-1）の周辺には、奈良・平安時代の遺跡が多く分布する。一迫川や二迫川沿いの河岸段丘や低い丘陵上には佐野遺跡（6）、糠塚遺跡（7）、大門遺跡（8）、御駒堂遺跡（14）、長者原遺跡（21）などの集落遺跡がある。なかでも、糠塚遺跡では奈良・平安時代の住居跡が30棟検出されており、住居跡出土土器は県北地域の国分寺下層式の基準資料になるものである（小井川・手塚 1978）。また、御駒堂遺跡は8世紀初頭に関東地方からの移住が想定されるような遺物や遺構が発見されており（小井



No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代	No.	遺跡名	立地	種別	時代	
1	伊治城跡 段丘	城相軸：吉坂、奈良・平安			10	照敷台遺跡	自然斜面 包合地	埋文、古代		19	照敷台遺跡	丘陵斜面 包合地	埋文、古墳、古代		
2	奈良寺跡 丘陵	寺院跡	古代		11	刈畠前跡	自然斜面 埋	築	中世	20	西筋遺跡	段丘	堆积物	埋文、中世	
3	尾佐遺跡	丘陵斜面 包含地	古代		12	鶴丸遺跡	段丘	堆积物	埋文～近世	21	長者原遺跡	段丘	堆积物	古墳、古代	
4	大沢遺跡	丘陵斜面	古墳、古代		13	宇南遺跡	段丘	堆积物	埋文～近世	22	毫引丘遺跡	丘陵斜面 包含地	埋文、古代		
5	植田第六古墳群	丘陵斜面	古墳		14	御駒堂遺跡	段丘	集落跡	埋文～近世	23	大仏古墳群	丘陵斜面 円 塚	古墳		
6	佐野遺跡	丘陵	集落跡	弥生、古代	15	山ノ上遺跡	段丘	集落跡	埋文、古代	24	宮野鎌跡	丘陵	堆	中世	
7	糠塚遺跡	段丘	集落跡	弥生、奈良・平安	16	木戸遺跡	丘陵	集落跡	埋文、古代	25	高田山遺跡	丘陵	包含地	埋文、古代	
8	大門遺跡	段丘	集落跡	筑文、奈良・平安、中世	17	佐内根遺跡	丘陵	集落跡	埋文、弥生、奈良・平安	26	豪斯山北遺跡	丘陵斜面 包含地	古墳		
9	風深遺跡	段丘	丘陵	古代	18	高倉貝塚	丘陵	貝塚	埋文、弥生	27	猪籠城跡	丘陵	城 鎔	中世、近世	

第2図 伊治城跡と周辺の遺跡

川・小川 1982)、栗原郡の建郡(神護景雲3年:769)以前のこの地域の動向を知る上で注目される。

なお、本遺跡の東4kmには、ヘラ切り無調整の環を主体に焼成した志波姫町狐塚遺跡(9)、さらに北方6kmには須恵器や瓦を焼成した金成町小追觀音窯跡があり、ここの製品が本遺跡にも供給されていた可能性がある。

III. 第22次調査

1. 調査の目的

先にも述べたように、これまでの調査によって伊治城跡の「政庁」の構造や変遷、その周辺域の構成も徐々に明らかになってきている。こうした成果を受けて、第22次調査は以下のような目的をもって調査を進めた。

① 南西部の外郭区画施設の確認

これまで発掘調査によって伊治城跡の外郭線が明確に確認できているのは、土堀と大溝跡のある北辺のみである(第3図)。これは現状でも台地の縁辺に沿って約150mほどにわたりその痕跡を観察でき(写真1)、昭和52年度の多賀城跡調査研究所の調査によってその存在が確かめられている(多賀城跡調査研究所 1978)。

この他、断片的ではあるが、その延長線上(西へ約100m)で道路の拡幅工事に伴う調査によって2条の大溝跡が、また、台地東端部でも道路の拡幅工事に伴う調査で2条の南北方向の大溝跡が検出されている(築館町教育委員会 1990・1991)。両地点とも調査区が狭く土堀などは発見されていないが、大溝跡の規模とその位置から考えて、これらは外郭区画施設の可能性が高いと考えられている。

一方、写真(昭和37年撮影)しか残っていないものの、台地の西縁部でも南北に走る土堀と大溝跡が存在したようである(築館町教育委員会 1989)。

このように北辺を除いては部分的な確認ではあるが、伊治城跡の外郭は土堀と大溝によって構成され、これらは台地の縁辺にそってめぐっていると想定することが可能である。しかし、南辺から西辺へといたる地点は背後の丘陵と接続する場所のため外郭線の位置が不確定である。そこで、第22次調査は外郭線が通る可能性が高いとみられる丘陵裾部に調査区を設定し、その位置を確定するとともに区画施設の構造を捉えることにした。

② SB410掘立柱建物跡の規模・構造の確認

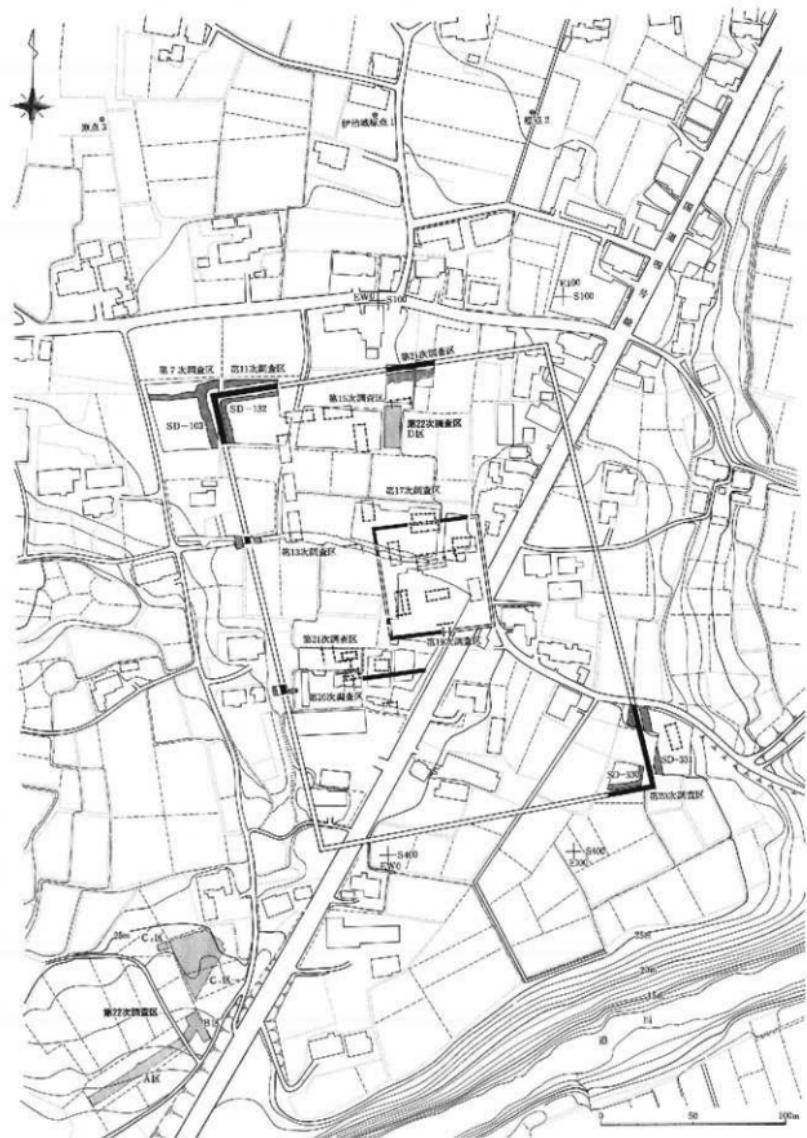
昨年の内郭北地区の調査では、一辺が約2.2m、深さが約1.6mという非常に大きな柱穴をもつ掘立柱建物跡(SB410)が発見されている。昨年の調査ではこの建物跡の規模・構造が分からなかったので、第22次調査ではその南側に調査区を設定し、それを確認することにした。また、あわせて他に建物跡などの遺構がないかどうかも調査することにした。



写真1 外郭北辺 (北から南をのぞむ)



第3図 伊治城跡と調査区



第4図 第22次調査区の位置

2. 調査の方法と経過

第22次調査は10月5日から開始した。調査地点は①外郭南西地区と②内郭北地区の2地点あり(第3図・第4図)、調査は外郭南西地区から始めた。この地区は外郭線の確認という目的のため、丘陵側から行政側へできるだけ長く調査区を設定することにしたが、この地点は畠地で収穫前のものもあったので、第4図のようにA～C区の場所を調査区として選定し、幅5mのトレンチを入れることにした。そして、遺構の検出状況に応じて調査区を拡張することにした。

調査は、丘陵側のA区から重機によって表土除去をはじめて順次B区・C区へと進め、精査を行った。A区は丘陵側(南西部)では遺構が検出されなかったが、中央部からB区側(北東部)にかけては掘立柱建物跡(SB440／437)や井戸跡(SE436)、竪穴遺構(SX435)、溝状の遺構(SX439)などが発見された。しかし、大溝や土塁などの区画施設は検出されなかった。B区では東側の地境に平行して溝跡の一部が検出された。そこで、地境側で調査区を拡張したところ、この地境にそって溝跡



写真2 外郭南西地区(南から)

SD420・431があることがわかった。次にC区側で調査を行ったところ、B区の溝跡(SD420)の延長がやはり地境にそって発見された。また、この溝跡の東側では、平行して2条の溝状遺構(SX421／422)があることが分かった。そのためこの調査区も拡張したところ、SD420溝跡、SX421・422溝状遺構は平行して南東から北西方向に走っていること、SD420溝跡は幅5mほどの大溝になること、また、掘立柱建物跡(SB426／427)があることなどが確認された。大溝跡(SD420)は、この拡張によってB区からC区へかけて総長約50mほど確認されたことになるが、ちょうど地境のため溝の両辺がともに確認できている区域がなかったので、C区の北西部に4m×4.5m(約20m²)の調査区を新たに設定した(この調査区をC₁区、それまでのC区をC₂区とした)。調査の結果、SD420大溝跡はこの地点では幅が4.5mほどになることが明らかになった。

遺構の平面的な確認が終了した段階で一部掘り下げをおこなった。SD420大溝跡は2ヶ所トレンチをいたれたが、いずれも深さが50～60cmと浅いことが判明した。また、SX421／422溝状遺構は両辺が共に曲がりくねっており、深さは20～30cmで底面には凹凸があること、堆積土は一度に埋め戻されたような状況を呈していることなどから、土取り痕の可能性が高いことが分かった。

外郭南西地区の調査中に、内郭北地区の調査も開始した。深さ約30～40cmの表土を重機で除去し、その後、精査をおこなった。その結果、SB410掘立柱建物跡の南西部のコーナー部分を検出し、これでこの建物跡は2間×3間の東西棟であることが判明した。この他に建物跡ではなく、土壤(SK443)と円形周溝？(SX444)とみられる遺構を確認した。

調査を開始して間もなく伊治城原点1を基準にしたグリッドポイントを設置し、遺構の精査・掘り下げと平行して平面図・断面図(S:1/20)の作成を行った。適宜、写真撮影(カラースライド・白黒)も行い、11月10日には記録をほぼ終えた。その後、補足的な調査とともに空撮を行い、11月14日には全調査を終了した。

なお、11月9日には報道機関、11月11日には一般を対象にした現地説明会(参加者約100名)を実施した。

3. 検出遺構と遺物

① 外郭南西地区（第5図）

この地区で発見された遺構には、外郭区画施設に関わるとみられる大溝跡(1条)・溝状遺構(2条)、ほかに掘立柱建物跡(5棟)、竪穴遺構(1基)、井戸跡(1基)、溝跡(9条)などがある。

遺物は少なく(第8図)、土師器・須恵器、瓦片、鉄製品(釘)、鉄滓が若干数出土したにすぎない。



写真3 外郭南西地区

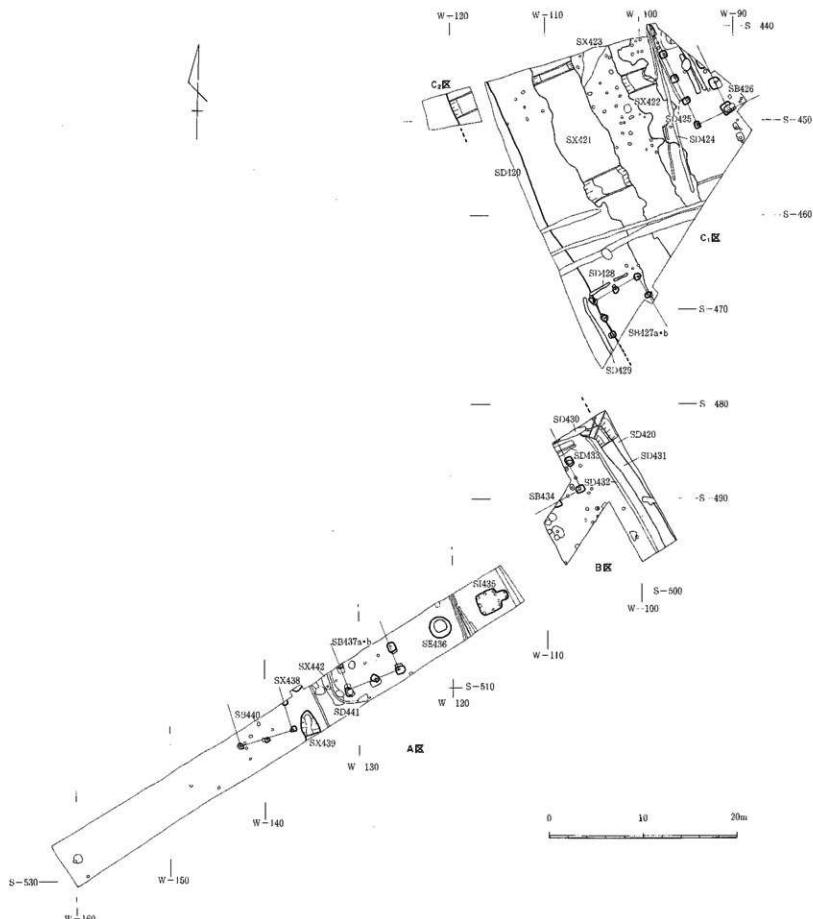
《大溝跡》

【SD420】(第6図) B区～C₁・C₂区で検出した。第6図に示したようにちょうど地境と一致しているため一部の検出にとどまっているが、南東方向から北西方向に直線的に総長約50mほど確認した。幅は約4.5m～5mほどと推定される。C₁区でSB427掘立柱建物跡、B区でSD431と重複しており、これらよりは時期的に古い。それぞれの調査区で部分的に掘り下げたところ、深さは約50～60cmと浅く、底面はほぼ平坦で断面形は逆台形をなしていることがわかった。堆積土はC₁区では下半が自然堆積土で、上半が黄褐色シルトブロック混じりの人为的埋土とみられるものである。一方、C₂区ではすべて自然堆積土である(第7図)。これらの堆積土はいずれも水成堆積ではないことから、大溝は空掘状であったものとみられる。

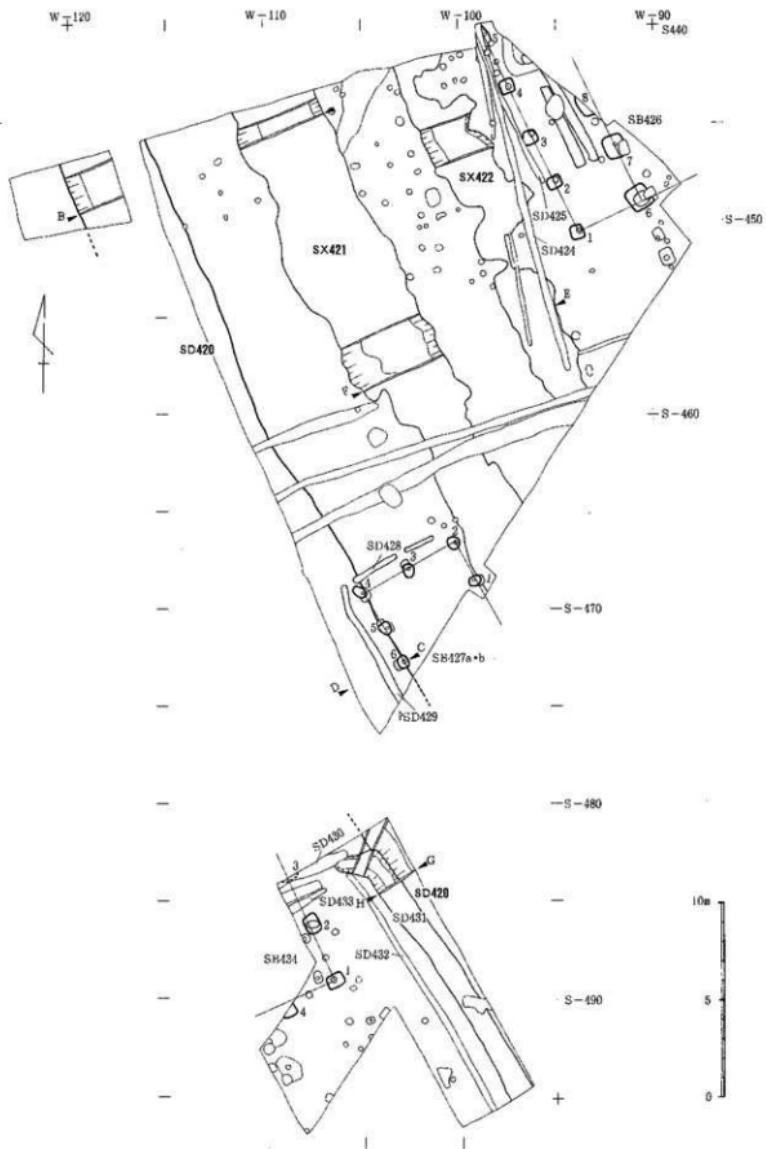
遺物はわずかであるが、上層から土師器壺・甕、須恵器壺・蓋・鉢・甕などが出土している(第8図1～4)。

《溝状遺構》

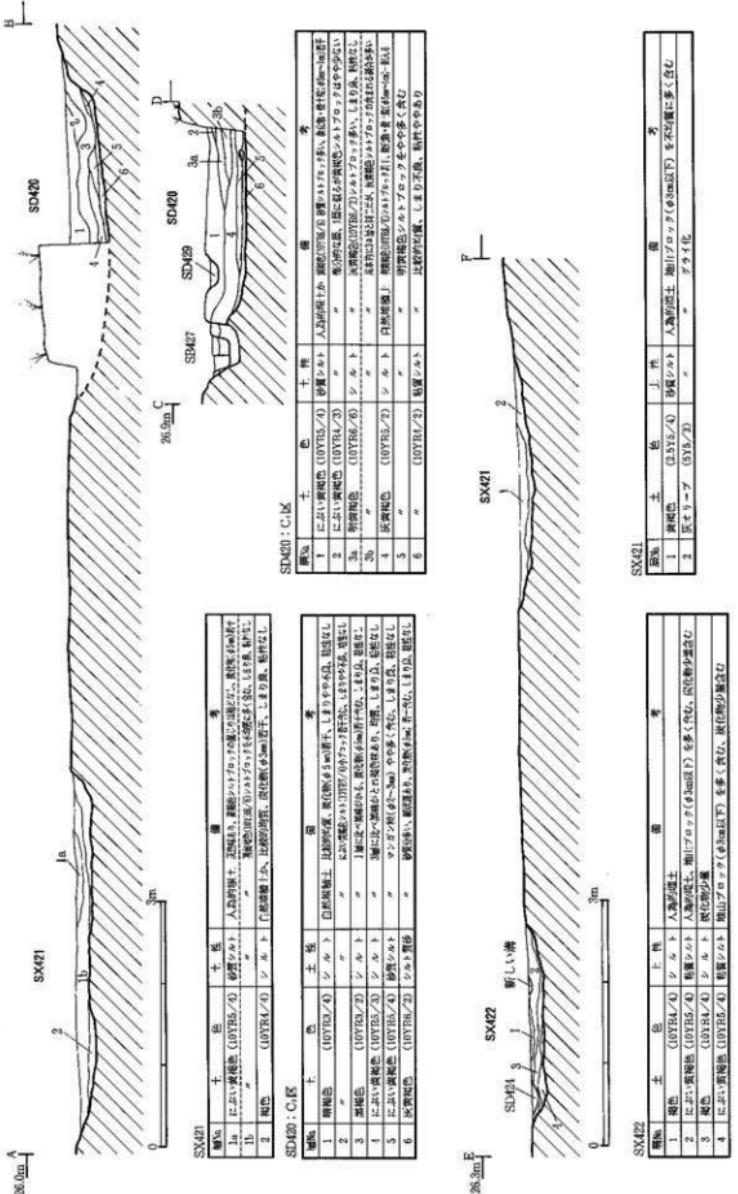
【SX421】(第6図) C₁区中央付近を南東から北西方向へのびる。先述のSD420大溝跡と平行する。SD420との幅は4～5mほどである。確認長は約31m、両辺は直線的ではなく曲がりくねっている。



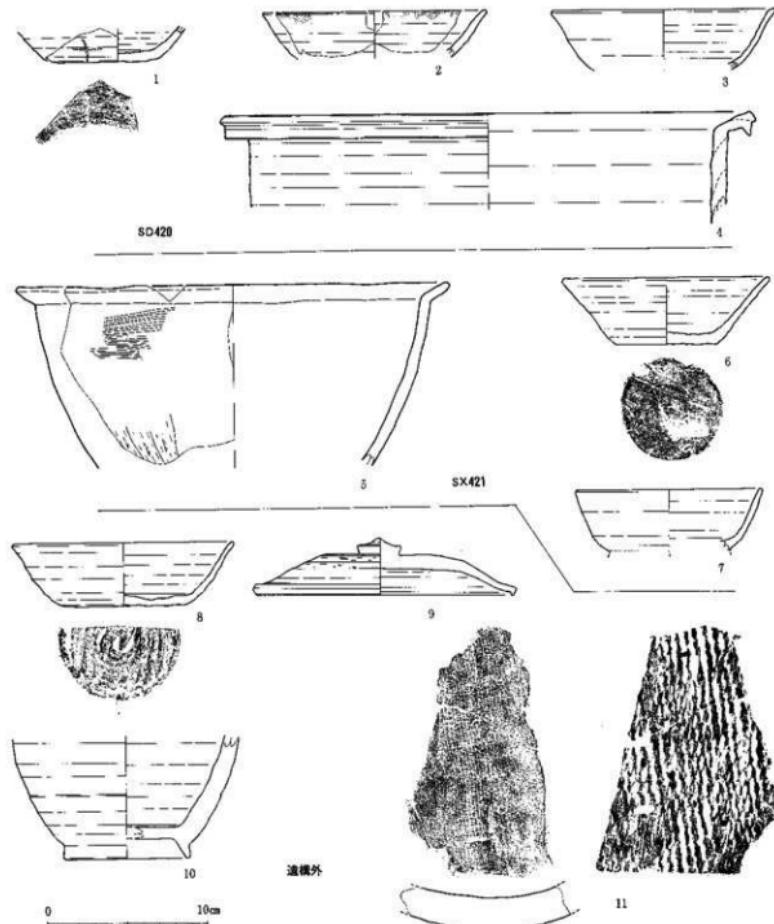
第5図 外郭南西地区遺構図



第6図 SD420大溝跡とSX421・422溝状遺構



第7図 SD420とSX421・422の断面図



名	器種	区・遺構・場	残存 寸 寸 寸 寸	法 量(cm)	等		写真図版
					口 径	底 径	
1	環形器 环	C. SD420埋1	1/6 " " "	(14.0) — —	—	—	外面：ロクロナゲ (+) ヘラ巻き 内面：ロクロナゲ 脊部：圓錐ヘラ切りナデ 9-1
2	"	"	" " "	1/6 " " "	—	—	外表面：ロクロナゲ 口縁部にタール状付着物 1-2
3	"	"	" " "	1/6 " " "	—	—	内表面：ロクロナゲ 3-3
4	"	"	" " "	1/20 " " "	(33.4) —	—	外表面：ロクロナゲ 4-4
5	土師器 箕	SX421埋1	1/20 " " "	(27.0) —	—	—	外面：(上)ロクロナゲ (下)ヘラケズリ 内面：マメツ 7-7
6	環形器 环	"	" " "	1/4 " " "	(12.8) —	6.2 —	外表面：ロクロナゲ 底部：圓錐ヘラ切りナデ 5-5
7	高台付6	"	" " "	1/8 " " "	(11.6) —	—	外表面：ロクロナゲ 6-6
8	" 36	" 土	1/3 " " "	8.0 —	4.0 —	—	外表面：ロクロナゲ 底部：圓錐ヘラ切りナデ 8-8
9	" 箕	" "	3/5 " " "	(16.4) —	—	3.5 —	外表面：ロクロナゲ →圓錐ヘラケズリ 内面：ロクロナゲ 9-9
10	長形盤	A "	1/4 " " "	— (7.8) —	—	—	内表面：ロクロナゲ 10-10
11	平 瓦	C. "	" " "	—	—	—	瓦底：有目ナデ 口面：處理き目 11-11

第8図 外郭南西地区 出土遺物

幅は最大で5.4m、最小で2.4m。一部掘り下げたが、深さは20~30cmで、底面には凹凸がある。埋土は黄褐色シルトブロック混じりのぶい黄褐色砂質シルト土体で、一度に埋め戻されたような状況を呈する。

遺物には、上部器坏・蓋・鉢・甕、須恵器坏・高台付坏・甕などがある(第8図5~7)。

【SX422】(第6図) SX422と同様の特徴をもつ。C₁区東寄りを南東から北西方向にのびる。SD420溝跡およびSX421溝状造構と平行する。SX422との幅は4m程度である。両辺は直線的ではなくSX421よりも曲がりくねっている。確認長は約24m、幅は最大で3m、最小で60cm。一部掘り下げたが、深さは20~30cm、底面には凹凸がある。埋土は黄褐色ロームブロック混じりの褐色シルトで、やはり一度に埋め戻されたような状況を呈する。

遺物には須恵器甕などがある。

《掘立柱建物跡》

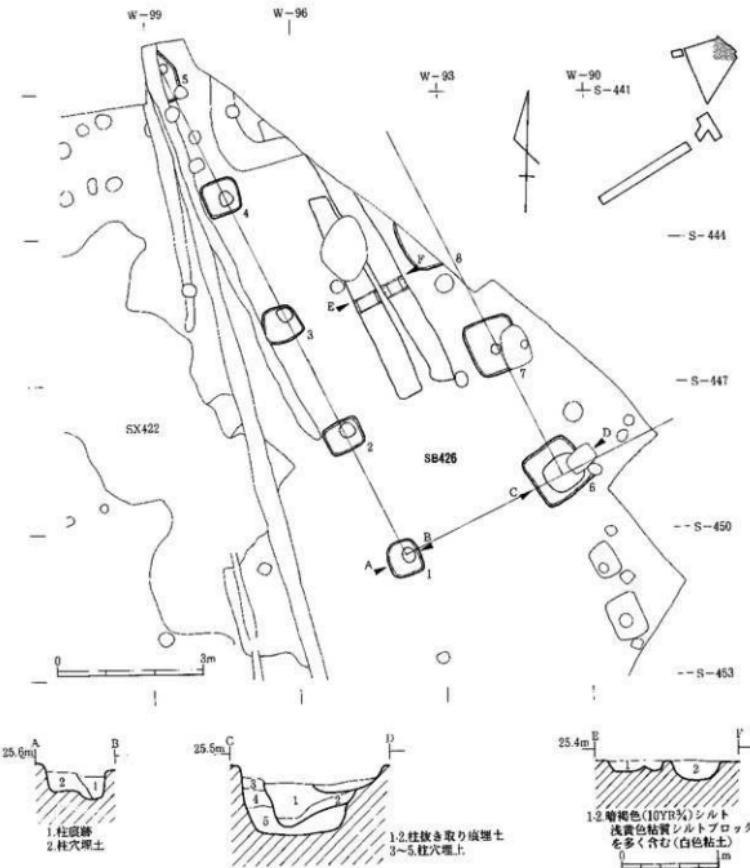
【SB426】(第9図) C₁区東側で一部分検出した。廻付きの建物跡と推定される。建物跡の身合の柱穴は南北に2間、廻の柱穴は南北に4間分確認した。身合の柱間寸法は2.8m、廻の柱間寸法は南北から2.8m・2.7m・2.7m・2.9m、身合と廻の柱間寸法は3.2~3.3mである。身合の柱穴は隅丸方形を呈し、一辺が約1.1m、深さは70cm、中央に径20cm程度の円形の柱痕跡が認められるものと柱抜取り痕があるものがみられる。廻の柱穴は一辺が約70cmの隅丸方形を呈し、深さは30cmほどである。径約20cmの円形の柱痕跡がいずれも認められる。身合・廻の柱穴掘り方埋土には白色粘土ブロックが比較的多くはいるのが特徴である。また、柱痕跡埋土には焼土・炭化物が多く含まれており、この建物跡は火災を受けた可能性がある。

なお、身合柱列と廻柱列の間に、これらの柱列に平行して2条の溝状造構が認められる。西側は長さ約4.5m、幅40~50cm、深さ10cm、東側は長さ5.5m以上、幅50cm・深さ20cmで、両者とも埋土は一度に埋め戻されたような状況を呈し、白色粘土ブロックを含むのが特徴である。内部には柱痕跡などは明瞭には認められなかった。性格は不明であるが、その形状や埋土の状況からSB426建物跡に付属する造構と考えられる。

【SB427】(第10図) C₁区南端で一部分検出した。南北2間以上・東西2間の規模で、一度建て替えが認められる。西側および北側柱列から70cm~1mほど離れてそれぞれ溝跡(SD428・429)も検出されている。この建物跡はSD420・SX421と重複するが、これらよりも時期的に新しく、断面図に示したようにSD420がほぼ埋まつた段階で建てられている。建て替え後の建物跡の柱間寸法は、西列では北から2.2m・2.0m、北列では西から2.7m・2.7mである。柱穴掘り方は不整形形状を呈し、長軸60~70cm・短軸50~60cm、深さは建て替え前が45cm、建て替え後は浅く35cmである。建て替え後の柱穴中央には径15cmほどの円形の柱痕跡が認められる。

なお、この建物跡に付属するとみられる溝跡SD428は、幅20~30cm・深さ5~10cm、SD429は幅40・深さ15cmの規模で、埋土は暗褐色砂質シルト～にぶい黄褐色砂質シルトの自然堆積土である。

【SB434】(第10図) B区の西側で、南北2間、東西1間分検出した。柱穴掘り方は長軸90cm・短軸

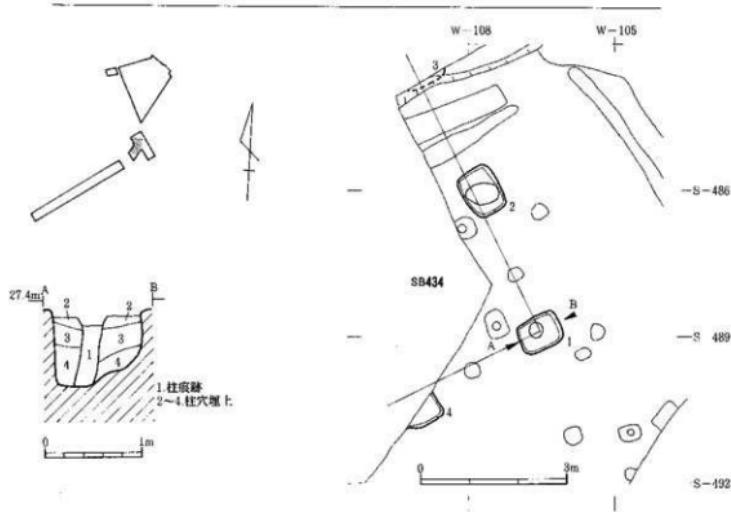
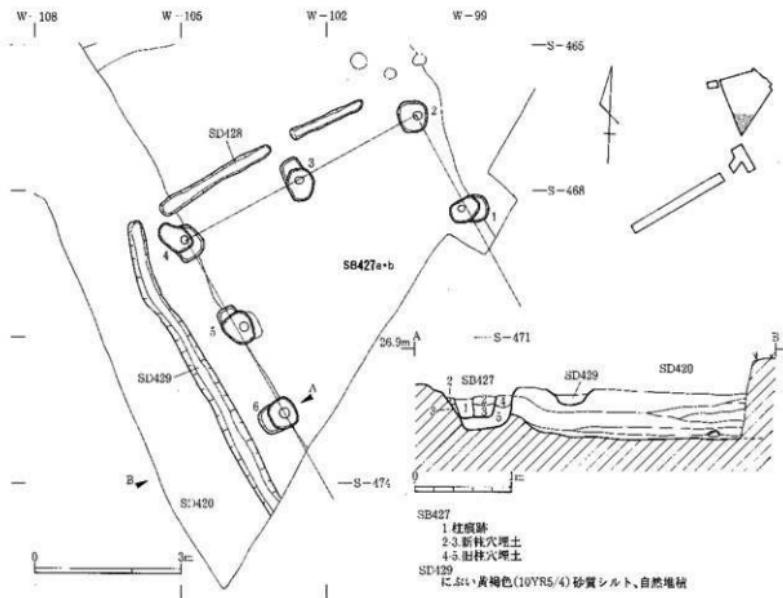


第9図 SB426掘立柱建物跡

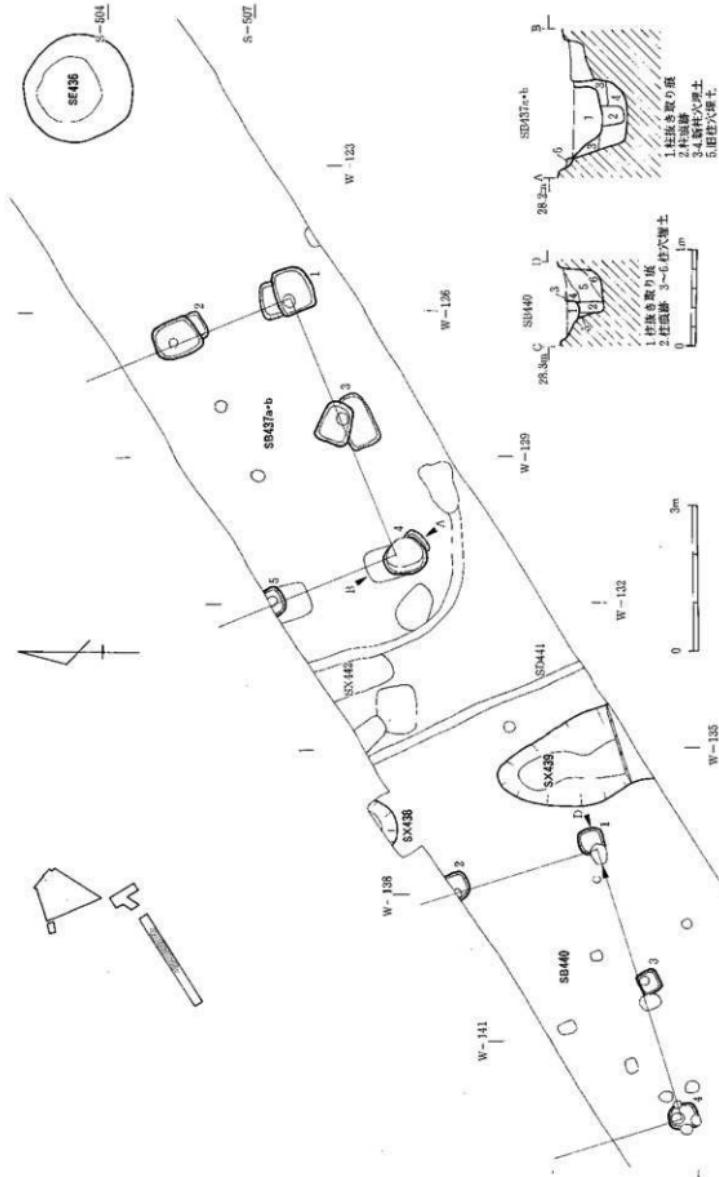
70cmの隅丸長方形、柱痕跡は径20cmの円形をなす。深さは約70cm。

【SB437】(第11図) A区の中央からやや東寄りで、東西2間、南北1間分検出した。少なくとも一度建て替えがなされている。柱穴掘り方は長軸約1m・短軸80cmの長方形状をなし、柱痕跡は径20cmの円形である。深さは約65cm。柱間寸法は、東西が西から(3.0m)・2.6m、南北が東側で2.6mである。

【SB440】(第11図) A区中央付近で、東西2間、南北1間分検出した。柱穴掘り方は隅丸方形状で、一边約40~45cmとこれまでのものに比べ小さい。深さは約50cmである。柱間寸法は東西が3.0m・3.0m、南北が3.0mと等間である。一部の柱は抜き取られている。



第10図 SB427a+b SB434掘立柱建物跡



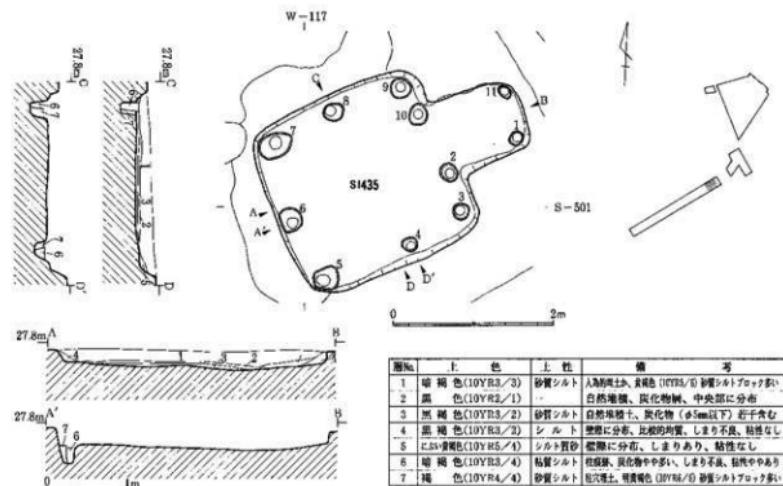
第11図 SB437・SB440擬立柱建物跡ほか

《堅穴遺構》

【SI435】(第12図) A区東側で検出した。一边が約2.3mの隅丸方形状で、東側に長さ約1.0m、幅90cmの張り出しが取り付く。深さは約20~30cm。四方の壁際には左右対称に柱穴が11ヶある。柱穴掘り方は径20~30cmの円形をなし、中央に径10cmほどの円形の柱痕跡が認められる。床面は地山面で、硬化した区域などは特に認められなかった。

埋土は、下半は自然堆積土であるが、上半は人為的な埋土と思われる。床面近くの堆積土中には炭化物層(埋土2)の広がりが観察された。

遺物は、堆積土中から土師器・須恵器の細片が少量出土したのみである。



第12図 SI435堅穴遺構

《井戸跡》

【SE436】(第11図) A区の東側で検出した。掘り下げていないが、棒を据え付けた井戸跡と推定される。掘り方は円形で、径は約2.2m、中央部には径1.2mほどの円形状に暗褐色砂質シルトの自然堆積土がみられる。

《溝跡》

【SD431】(第6図・第13図) B区の東側で検出した。南北に走るSD420大溝跡と並行しつつ重複し、これよりも時期的に新しい。北側で西へ折れて立ち上がる。確認長は約15m、幅約1.2mである。一部を掘り下ろしたところ、断面形は浅い逆台形状で、深さは約30cmほどであった。堆積層は暗褐色~褐色砂質シルトの自然堆積層である。遺物は堆積層から土師器細片が若干出土したのみである。

【その他】(第5図) A~C区では小規模な溝跡が多く確認されている。中には明らかに現代のも

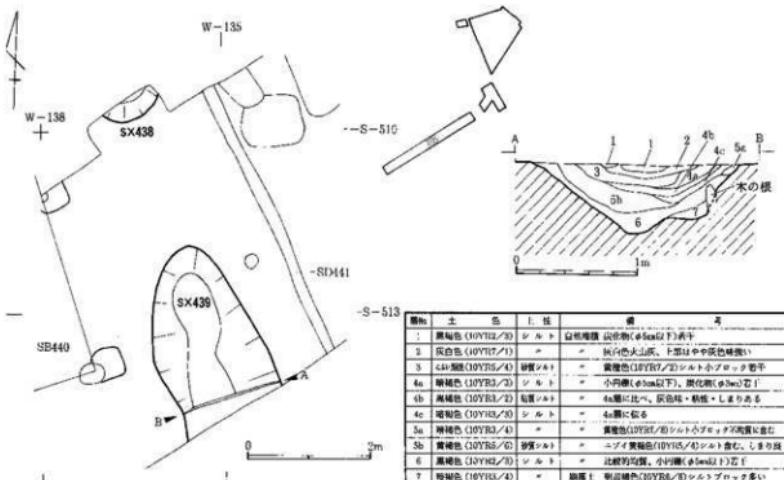
の、あるいは古代までは遡らないとみられるものもあるが、SD425・430・432・441などのように時期が不明確な溝跡も多い。また、A区のSD441のように幅の狭い布掘り状を呈するものがあるなど、形状も様々である。

《その他》

【SX439】(第14図) A区中央部で検出した。部分的な確認のためその他の造構に含めたが、形状および堆積土からみると溝跡である可能性が強い。確認長は2.8m、幅1.8m、深さは約70cmである。断面形は逆台形状に近いが、底面にはやや凹凸がある。堆積土は自然的なもので、上位には灰白色火山灰(10世紀前半)が認められる。

このSX439の延長線上で、調査区の北辺側を一部拡張したところ、SX438が立ち上がる地点から約2.3~2.4m離れてあらたに落込み：SX438が確認された。これらは形状やその位置関係からみて一連のもの(区画溝？：間が入り口)である可能性も考えられる。

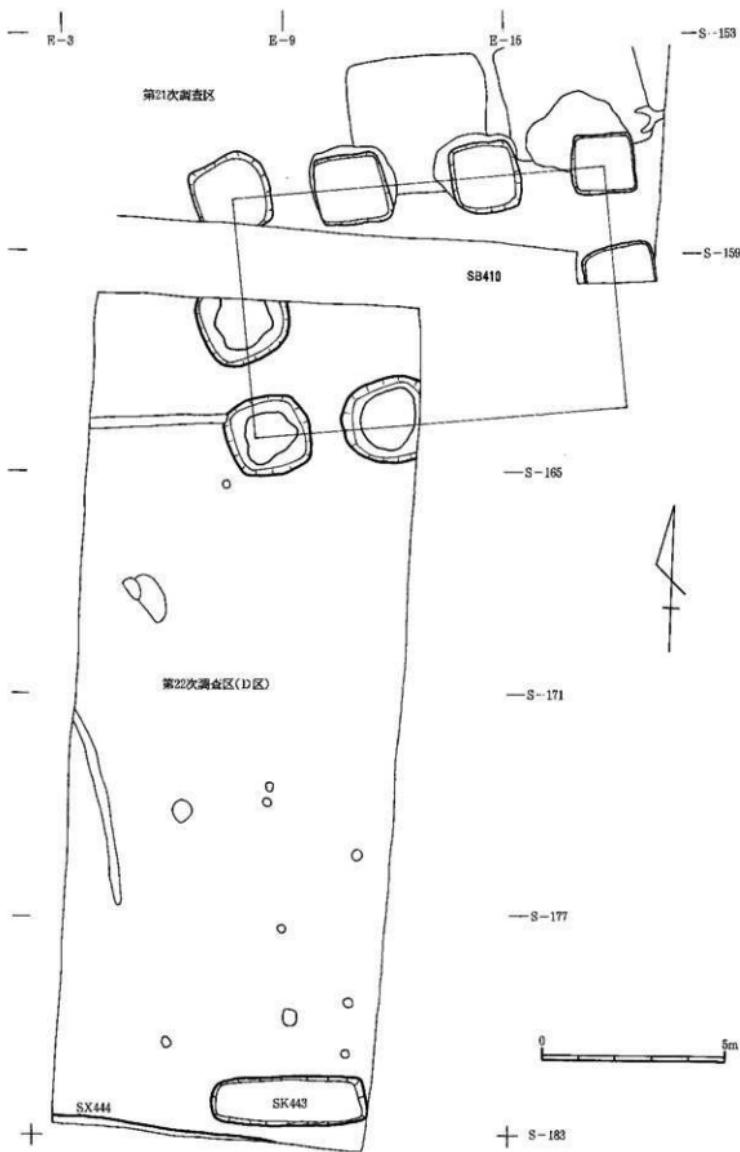
なお、SX439では下部(埋土6層)から土師器細片が数片出土したのみである。



第14図 SX438・439

② 内郭北地区(D区)

D区(約204m²)では、昨年検出した掘立柱建物跡(SB410)の一部、他に土壙1基、円形周溝？1条などが発見された(第15図)。遺物は少なく、土師器・須恵器・瓦片が若干数と円面鏡(1点)が出土したのみである(第16図)。



第15図 内郭北地区遺構図

《掘立柱建物跡》

【SB410】(第15図) 昨年の調査では北側の東西3間分と東側1間分の柱穴を確認していたが、今回はこの建物跡の南側区域の一部を調査したところ、南西部の柱穴を3基検出した。これによつて、この建物跡は東西3間、南北2間の東西棟であることが判明した。

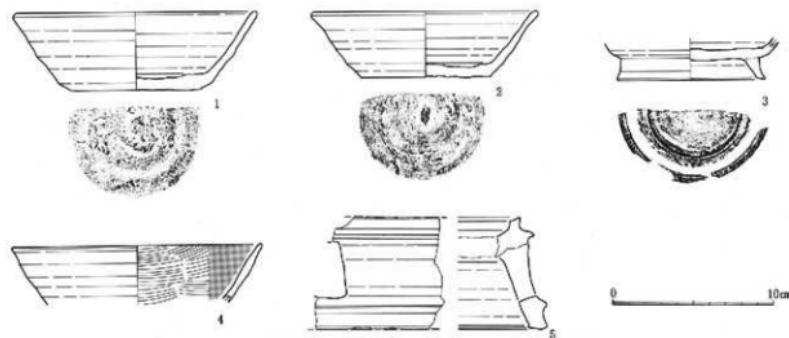
この建物跡の柱穴は隅丸方形状で、一辺が約2.2m~2.4mと非常に大きく、深さも昨年の調査では約1.6mになることが分かっている。い

ずれもその中央部に径1.4m~1.5mほどの不整円形状の柱抜き取り痕が認められる。柱間寸法は、柱穴の中心点をもとにすると西側の柱列では3.3m・3.3mで総長6.6m、北側の柱列では3.3m・3.7m・3.4mで総長10.4mである。

この建物跡は位置的にみると政府北側の中軸線上で、政府北辺築地からは約63mの距離にある。建物跡の方向はN-8°-Wである。

《土 壤》

【SK443】(第16図) 調査区の南側で検出した。平面形は長方形状で、長軸約4.2m、短軸約1.3mである。深さは20cmと浅い。底面はほぼ平坦である。埋土は1層のみで、暗褐色(10YR3/4)シルトに黄褐色粘質シルト小ブロックが多く混じり、一度に埋めもどされたような状況を呈する。



No.	器種	出土層	残存	法 級(cm)			特 級	写真版
				口径	底径	脚高		
1	須恵器 环	表土	1/2	(15.2)	8.0	4.5	内外面:セクロナデ 底部:回転ヘラ切りーナデ	9-13
2	"	"	1/3	(14.2)	8.2	4.1	内外面:セクロナデ 底部:回転ヘラ切りーナデ	12
3	高台付环	"	1/6	-	(9.1)	-	内外面:セクロナデ	14
4	土師器 环	"	1/8	(15.6)	-	-	外:面:セクロナデ 内面:ロクナデ→ヘラミガキ→黒色処理	15
5	内 面 磁	"	1/8	-	-	-	内外面:セクロナデ 磁器状の四角窓	16

第16図 内郭北地区出土遺物



写真4 内郭北地区

遺物は埋土から土師器・須恵器の小片が若干数出土したのみである。

《その他》

【SX444】(第15図)調査区の南端部にそってやや湾曲する暗褐色シルトの広がりが僅かに認められた。ごく一部の平面的な確認なので不明確ではあるが、その形状からするとこの周辺で前にも検出されたことがある円形周溝(古墳)の可能性もある。

4. 考 察

《外郭南西地区》

今回の調査の主要な目的は、伊治城跡の南西部の外郭線の確認であった。まずははじめにこれまでの外郭線の調査についてとりあげ、次に南西地区で今回検出した大溝跡・溝状遺構、その他の遺構について検討を加える。

① これまでの外郭線の調査

これまでのところ外郭線についての調査は主に北側区域の数カ所で行われている(第17図)。しかし、一部を除いては断片的な調査にとどまっており、その位置や構造などについては未解明な部分が多い。

第1地点では前にも述べたように北辺の土塁と大溝跡の痕跡が今でも150mほどにわたって観察することができるが(第17図)、この区域の一画を多賀城跡調査研究所が調査したところ、これは幅約7.5m・現存高2.5mの土塁と幅約10m・深さ約3.5mの人溝跡であることが明らかになった(多賀城跡調査研究所 1978)。この東側の第2地点では水道管理設および道路整備にともなって調査が行われ、ごくせまい範囲の調査であったものの、南北にはしる幅3.5~4m・深さ60~70cmの溝跡が2条検出されている。同様に、西側の第3地点でも道路整備に伴って幅約10m・深さ2.5m以上の大溝跡と幅2.0m・深さ1.3mの溝跡が発見されている(築館町教育委員会 1990・1991)。

第4地点は発掘調査ではないが昭和37年に撮影された写真が残っており、これによれば台地縁辺にそって南北にはしる土塁と大溝の痕跡をみるとめることができる。ただし、この地点は後に鹿島壇改修によって失われており、現在では観察できない。なお、この場所から南へ降った地点では宮城県多賀城跡調査研究所が電気探査を実施し、丘陵末端部から約30mの地点で溝状の落込みを検出しているが、これは南北方向の延びが不明確で外郭線大溝とは断定しかねるという結果であった(多賀城跡調査研究所 1979)。

以上のように、これまで外郭線については北辺の一部をのぞいては断片的な手がかりしか得られておらず、その構造や規模についてもまだはっきりしていない。しかし、これまでの調査結果からみる限り、伊治城の外郭線は基本的に土塁と大溝によって構成され、そのラインは遺跡が立地する台地の縁辺を走っていると考えてよさそうである。

② 南西地区：大溝跡と溝状遺構

遺跡の立地する台地は平坦な方形状のはば独立した地形であるため、外郭線を台地縁辺に比較的求



第17図 外郭線調査地点(X)と外郭推定線

めやすい。しかし、台地は南西部で背後の丘陵と連なっており、この地点は外郭線の位置を地形から想定するには難があった。そこで、今回は南西部の丘陵裾部から北東の内郭方向へ調査区を設定して外郭線の位置を確認することにしたわけであるが、調査の結果、現在の地境に一致してSD420大溝跡

とその内側(内郭側)には平行する2条の溝状遺構: SX421・422が検出された。これらは内郭南西隅の地点から南西方約へ約100mのところにある。

このSD420大溝跡は総長約50mほど確認しており、北および南側へさらに直線的に延びることは確実である。深さは約50~60cmと浅いものの、幅は約4.5~5mほどある。これと平行して走る2条の溝状遺構は、埋土を観察するとすぐに埋め戻されたような状況を呈し、形状も通常の溝とは異なって両辺が曲がりくねっている。これらの遺構は、ともに伴う遺物が少ないと年代的な位置づけが不確定ではあるが、出土遺物(第8図)は伊治城跡の年代(8世紀後半~9世紀初め)の中にはおさまるものである。

ところで、伊治城跡の内郭および政庁の区画施設においては、その外側には大溝があり、その内側には築地塀などの構築に使われた土取りの痕とみられる溝状の遺構がある。また、外郭東辺とみられる第2地点においては2条の溝が確認されており、内側の溝は上取り後埋め戻されたような状況をもつ。こうしたことを考えあわせると、当地区の大溝跡と溝状遺構はともに区画施設に関わる遺構であり、SD420大溝跡は区画施設の一部、平行して走る溝状遺構は区画施設(例えば土塁)の構築のための上取り痕と考えることが可能である。つまり、地形的な位置や年代からみてSD420大溝跡は伊治城の「外郭」区画施設の一部と捉えられるものである。

この場合、北辺の状況からすると大溝と共に区画施設を構成するものに「土塁」が想定される。しかし、今回の調査では土塁の痕跡は確認できなかった。現時点ではこれは削平によって失われたものとみておきたいが、土塁があったとすれば位置的にはSD420とSX421溝状遺構の間(幅4~5m)が考えられる。いずれ、今後の延長線上の調査によって今回の遺構の性格が定まり、さらに、これまで触れなかったが溝状遺構(上取り痕)が2条ある理由なども解明できるようになるものと思われる。

さて、SD420大溝跡が外郭区画施設の一部であると考えると、南西部をとおる外郭線の位置が概ね推定でき、これと遺跡の立地する地形を考え併せれば、伊治城の外郭線の位置はおおよそ第17図の破線のように描くことが可能である。ただし、これはあくまで現在までの少ない調査結果にもとづいた想定であり、今後も更に多くの地点で調査を行って外郭線の位置を確定し、その構造・規模などを解明していく必要があろう。

③ 南西地区: その他の遺構

外郭南西地区では人溝跡・溝状遺構の他に掘立柱建物跡、竪穴遺構、井戸跡、溝跡などが発見されている。これらの遺構のうち、SB427掘立柱建物跡は明らかにSD420大溝跡・SX421溝状遺構より新しく、SX435竪穴遺構は形態的には中世のものに類似しているなど、遺構の時期には幅がありそうである。しかし、周辺出土の遺物(表土など)は伊治城の年代から外れるものではなく、遺構の多くは伊治城時代のものと考えられる。特にSX439は上部に灰白色火山灰(10°C前半)が堆積しており、伊治城時代に属する可能性が高い。

ここで重要な点は、SD420大溝跡を外郭区画施設とすると、SD420より西側の遺構群はその外側に位置するということである。つまり、外郭区画施設の外側にも遺構が展開するということになる。また、SX438・439は性格的には区画施設である可能性もあることから、この場合には外郭施設のさら

に外側にもX画施設を持った空間が存在するということにもなる。遺構はいずれも部分的な検出なので積極的には言えないものの、そうした可能性が充分考えられる。

《内郭北地区》

この調査区は昨年検出した大きな柱穴を持つSB410掘立柱建物跡の規模・構造の確認と言うこともあり、調査面積はせまく、特に新たな展開はなかった。

SB410についてみれば、建物の規模は2間×3間、面積も通常のものとそれほど違いがなく、特別な規模・構造ではないことがわかった。しかし、柱穴の大きさは一辺約2.2～2.4m・深さは1.6mもあり、政庁正殿(一辺1.5～1.7m・深さ約80cm)よりも一回り大きく、伊治城においては群を抜いている。また、この建物は位置的にみると、内郭の北側で政庁中軸線上にある(第4図)。こうした点から考えると、この建物は特別な役割を担ったものであることが容易に推察されるが、今後はその具体的な性格・機能が問われることになるものと思われる。

なお、この建物は昨年の調査(第21次調査)では遺構の新旧関係から時期的にはⅢ期(火災後に建て替えられた建物群)に位置づけられ、伊治城においては後半の段階に置かれている(築館町教育委員会 1995)。

引用・参考文献

*これまでの『伊治城跡』発掘調査報告書については、付表1を参照のこと

工藤雅樹 1989 「城柵と櫓」 ニューサイエンス社

小井川和夫・手塚 均 1978 「糠塚遺跡」『宮城県文化財発掘調査略報』

宮城県文化財調査報告書第53集

小井川和夫・小川淳一 1982 「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』

宮城県文化財調査報告書第83集

進藤秋輝 1991 「城柵の設置とその意義」『北からの視点』 pp.131～142

日本考古学協会宮城・仙台大会シンポジウム資料集

付表1 『伊治城跡』調査および報告書一覧

◎多賀城跡調査研究所による調査

年次	調査内容	発掘面積	発掘期間	備考	文献
昭和51年度 (1976)	地形図作成(航空測量) 現地踏査・研究史整理				
昭和52年度 (1977)	①北外郭線発掘調査 中央平垣部地区発掘調査	168m ² 270m ²	7/4~8/3	大溝1、土壁1、土塁状遺構1 焼失窓穴住居1、墨書き器「城跡」	(1)
昭和53年度 (1978)	②中央平坦部地区発掘調査 西邊外郭線地区電気探査	780m ²	7/3~8/4 11/11~11/13	窓穴住居4、掘立柱建物1、井戸6、溝5、 土塁4	(2)
昭和54年度 (1979)	③中央平坦部地区発掘調査	1,000m ²	10/29~12/4	窓穴住居17、掘立柱建物2、井戸、溝、土塁	(3)

◎築館町教育委員会・宮城県文化財保護課による調査

昭和62年度 (1987)	1. 農道整備	220m ²	7/1~8/12	窓穴住居5(うち焼失住居1)、溝4、井戸1 窓穴住居5、土塁1 窓穴住居8 窓穴住居7、土塁2、溝	(4)
	2. 農地土木移転	150m ²	7/4~7/18		
	3. 個人住宅便橋取付	2m ²	8/5		
	4. 水道管理設	1,250m ²	9/1~9/14		
	5. 農道整備	1,080m ²	1/18~2/9		
	6. 寄舍建築	80m ²	2/25		
昭和63年度 (1988)	7. 國庫補助事業	1,500m ²	7/1~10/30	内郭区画溝2、窓穴住居2、土塁、円形周溝1 東外郭大溝1?、窓穴住居3、溝	(5)
	8. 水道管理設	142m ²	11/4~11/22		
	9. 農道整備	504m ²	2/6~2/12		
平成元年度 (1989)	10. 宅地現状変更	480m ²	4/11~6/1	窓穴住居8、掘立柱建物1、土器埋設土塁1 内郭区画溝1、掘立柱建物3、窓穴住居9 北外郭大溝2、占領時代前期溝1 内郭区画溝2、「政序城」掘立柱建物、溝 窓穴住居3	(6)
	11. 国庫補助事業	1,200m ²	7/21~11/22		
	12. 通字路整備	1,700m ²	9/5~9/16		
	13. 農道整備	1,960m ²	10/16~11/10		
平成2年度 (1990)	14. 水道管理設	170m ²	11/29~12/8	掘立柱建物3、窓穴住居8、円形周溝1、井戸2 東外郭大溝2?、窓穴住居16、溝、井戸、土塁	(7)
	15. 国庫補助事業	900m ²	9/3~9/29		
	16. 道路整備(大堀線)	1,320m ²	9/27~10/5		
平成3年度 (1991)	17. 国庫補助事業	1,300m ²	5/27~7/16	「政序城」正殿・後殿・脇殿・築地 古墳時代洞窟跡	(8)
	18. 個人住宅	300m ²	11/19~12/2		
平成4年度 (1992)	19. 国庫補助事業	1,300m ²	5/11~7/4	「政序城」正殿・後殿・脇殿・南門・築地 〔内郭南側〕掘立柱建物、窓穴住居、溝、土塁	(9)
平成5年度 (1993)	20. 国庫補助事業	1,500m ²	10/4~11/18	〔内郭南東隅〕築地、掘立柱建物、窓穴住居 〔内郭南側〕掘立柱建物、窓穴住居、土器埋設	(10)
平成6年度 (1994)	21. 国庫補助事業	820m ²	10/3~11/27	〔内郭北側〕掘立柱建物、窓穴住居、溝 〔内郭南側〕掘立柱建物、窓穴住居、古墳	(11)

- (1)宮城県多賀城跡調査研究所 1978 「伊治城跡I - 昭和52年度発掘調査報告」 「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告第3集」
 (2) " 1979 「伊治城跡II - 昭和53年度発掘調査報告」 「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告第4集」
 (3) " 1980 「伊治城跡III - 昭和54年度発掘調査報告」 「多賀城跡関連遺跡発掘調査報告第5集」
 (4)築館町教育委員会 1988 「伊治城跡 - 昭和62年度発掘調査報」 「築館町文化財調査報告書第1集」
 (5) " 1989 「伊治城跡 - 昭和63年度発掘調査報」 「築館町文化財調査報告書第2集」
 (6) " 1990 「伊治城跡 - 平成元年度発掘調査報」 「築館町文化財調査報告書第3集」
 (7) " 1991 「伊治城跡」 「築館町文化財調査報告書第4集」
 (8) " 1992 「伊治城跡 - 平成3年度発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第5集」
 (9) " 1993 「伊治城跡 - 平成4年度発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第6集」
 (10) " 1994 「伊治城跡 - 平成5年度発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第7集」
 (11) " 1995 「伊治城跡 - 平成6年度発掘調査報告書」 「築館町文化財調査報告書第8集」

付表2 伊治城および栗原郡に関する古代史年表

西暦	和暦	記事	文献
767	神護景雲1	10. 伊治城の造営なる。造営にたずさわった鎮守將軍田中多太麻呂らに叙位、外從五位下道嶋一山は從五位上を賜う。	統日本紀
768	2	12. 陸奥や他国の百姓で伊治・桃生に住みたいものの課役を免ずる。	統日本紀
769	3	1. 伊治・桃生にうつり住みたいものの課役を免ずる。 2. 桃生・伊治に板東8国の百姓を募り安置しようとする。 6. 栗原郡をおく。これはもと伊治城である。 (「統日本紀では神護景雲元年11月乙巳条に収めるが錯簡とみられ、ここでは神護景雲3年6月9日乙巳説をとる) 6. 浮宿の百姓2,500人を伊治城に遷す。	統日本紀 統日本紀 統日本紀
780	宝亀11	3. 上治郡大領伊治公皆麻凸は牡鹿郡の人領道嶋人権、按察使紀広純を伊治城で殺す。ついで、多賀城にせまり府庫の物をとり放火する。	統日本紀
792	延暦11	1. 斯波村の夷胆沢阿奴志己らは帰服したいが伊治村の俘に妨げられて果たせないでいることを訴える。	類聚国史卷190
796	15	11. 伊治城と玉造塞の中間に1駅を置く。 11. 相模・武藏・上総・常陸・上野・下野・出羽・越後などの住民9,000人を伊治城に遷し置く。	日本後紀 日本後紀
804	23	11. 栗原郡に3駅を置く。	日本後紀
837	承和4	4. 3年春より百姓の妖言に奥邑の民が動搖し、栗原・賀美両郡の百姓多く遁亡する。また、栗原・桃生以北の俘囚は反覆して定まらないので援兵1,000人を差発して非常に備える。	統日本後紀
905	延喜5 (着手)	延喜式 ○神名式 陸奥国100座 栗原郡7座 大1座 表刀神社 小6座 志波姫神社 雄鏡神社 駒形根神社 和我神社 香取御兒神社 ○民部式 東山道・陸奥国大國 ……志太、栗原、磐井…… ○兵部式 陸奥国駄馬 ……玉造、栗原、磐井……各5疋	
931 ～ 938	承平年間	和名類聚抄 陸奥国 栗原郡(久利波良) (郷名) 栗原・清水・仲村・会津	和名類聚抄

報告書抄録

ふりがな	いじじょうあと							
書名	伊治城跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	染館町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	佐久間 光平							
編集機関	宮城県教育委員会							
所在地	〒980 宮城県仙台市青葉区本町3-8-1 TEL 022-211-3682							
発行年月日	西暦 1996年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号	○.○	○.○	～		
いじじょうあと 伊治城跡	宮城県 栗原郡染館 町字城生野	045217	41007	38度 45分 50秒	141度 02分 40秒	19951005 ～ 19951114	1,140	外郭確認 ほか
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
伊治城跡	城柵跡	奈良～ 平安時代	掘立柱建物跡 竪穴造構 大溝跡 その他の溝跡 溝状造構 (土取り痕) 井戸跡 土壤	6棟 1軒 1条 9条 2条 1基 1基	土師器 須恵器 瓦 鉄製品(釘) 鉄滓	大溝跡および溝状造構(土取り痕)は、 南西部外郭区画施設 に関わる遺構と推定 される。		

写 真 図 版



図版1 上：外郭南西地区遠景（南から） 下：外郭南西地区



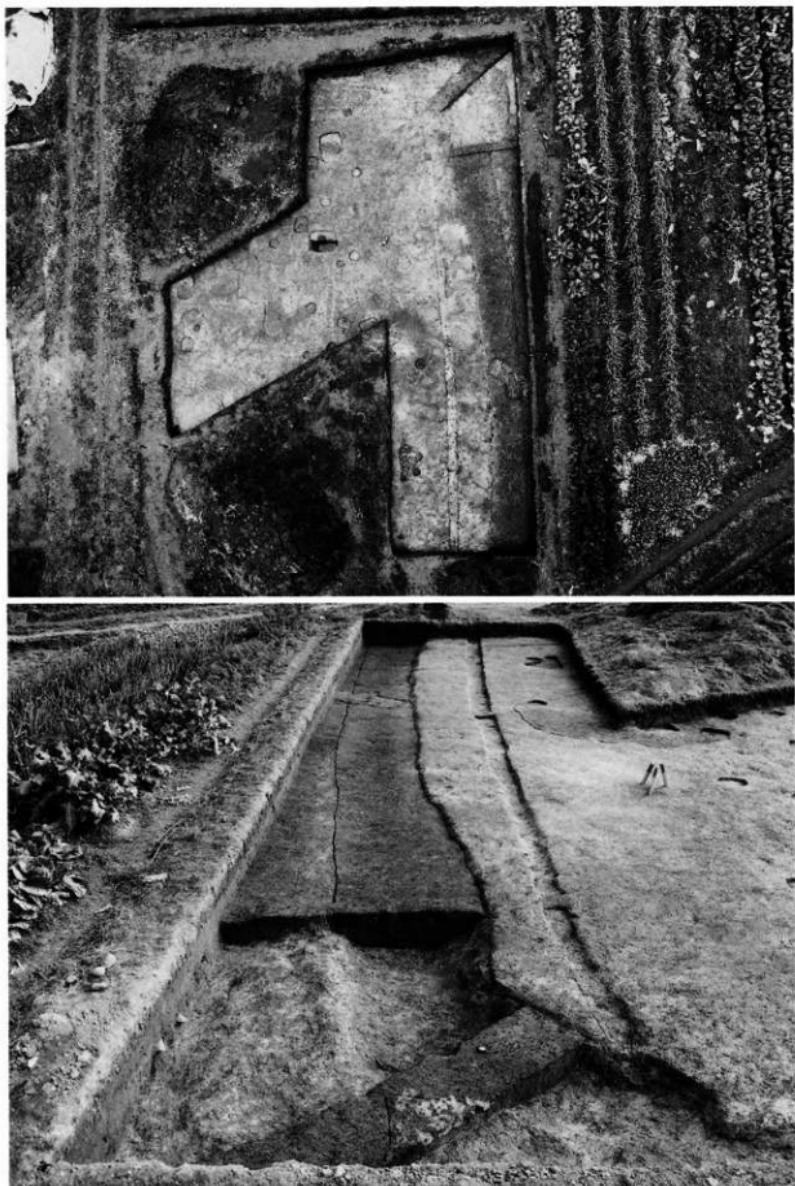
図版2 上：外郭南西地区（C4区） 下：C1区 SB426（西から）



図版3 上:C区 SB427 下:C₂区 SD420大溝跡(北から)



図版4 上：C区 SD420大溝跡断面(北から) 下：SX421断面(北から)



図版5 上：B区 下：B区 SD420・SD431（北から）



図版6 上：A区 下：A区 SX435整穴遺構（西から）



図版7 上：A区 SX438・SX439 下：A区 SX439断面（北から）



图版8 上：内郭北地区(D区) 下：SB410



外郭南西地区
1～4：SD420
5～7：SX421
8～11：表土
内郭北地区
12～16：表土

$S = \frac{1}{2}$

図版9 出土遺物

築館町文化財調査報告書 第9集

伊 治 城 跡

印 刷 平成8年3月20日

発 行 平成8年3月31日

発 行 築 館 町 教 育 委 員 会
宮城県栗原郡築館町築館一丁目7-1

印 刷 所 小 野 寺 印 刷 所
宮城県栗原郡築館町伊豆 一丁目7-3

